

戯曲 勢 至

九 第二場

高 木 隆 玄

時代 長承三年四月七日

場所 美作國漆時國の館庭に面せる一室

登場人物

漆時國 卅六歳

妻秦氏 卅四歳

勢至丸 二歳

百姓與作 四十歳位

幕開く

〔前方の庭に櫻樹二本ありて花既に散り青葉繁り他に數本の雜樹植り右隅に竹縁ありてその前に石の手水鉢あり手拭掛は竹縁の端にあり遠く塀を越へて大椋木見ゆ。座敷の庭に面せる側に時國机に向つて讀書す、やゝありて讀書にうみて塀外の椋を眺めて感あるの態。秦氏勢至丸を抱いて此時登場〕

秦「これは御前様には御書見に御座りまするか」

〔と云ひて時國の横に着座す時國座向きを變へて〕

時「オ其方かいは暇つぶしの讀書じやわい、今日

は心特の善い天氣で氣が軽くなるのう」

秦「左様に御座りますさぞ百姓衆が喜んで働いてゐる事で御座りませう」

時「さもあらうくく」

時「時に勢至丸も初や初誕生が參つたのう」

〔と時國喜悅の面持ちにて妻の顔を見る妻微笑し〕

秦「御意の如く今日が初誕生に御座りまする」

〔時國増々喜悅の態にて子供の顔を見入り乍ら〕

時「今日で初誕生とは早いものぢや四月七日は

勢至丸の誕生日として八日は御佛様の誕生日

いや吉日に生れたものぢやのう」

秦「如何にも月日の經つのは早いもの、はや和子

も生れて滿一年になりまするで御座ります

る」

〔時國妻の言葉に何か感じたる態なりしがやゝして勢至丸の頭に手をのせて〕

〔と云ひて時國の横に着座す時國座向きを變へて〕

時「オ其方かいは暇つぶしの讀書じやわい、今日

時「其方も早や初誕生か大部大きくなつたのう」

（と言ひ乍ら兒供に顔で愛想をし勢至丸の笑ふにつられて自身も笑ひ乍ら）

時「そうくく和子の初誕生の祝ひを村の衆

に何か配らねばならぬがも早や配つたかの」

（と妻を見守る秦氏得たり顔にて）

秦「ハイ左様思ひまして今朝程心ばかりの祝ひ

の品を配りまして御座ります」

時「それは大儀であつたのう、何も和子の爲なれ

ば」

（と時國語らんとする時子供なく、妻は乳房を含ます）

時「其方も忘れはしまいが、勢至丸は観音様に祈

つて授りたる賜り子で、然も漆家の血を受け

た者なればこの家の名譽も揚げるであらうし

又観音菩薩の様な慈悲深ひ人になるであらう

さすればこの漆家も末代までも榮える譯であ

るわい」

秦「左様に御座ります、観音菩薩の様になつてく

るればなによりに御座ります」

時「あの誕生の奇瑞を思へば、實にこれの行末も

頼もしい様に思はれるが、何んと言つても、漆の家に取つてはかけ換えのない一粒種、も

しかの事が出来たなれば」

（時國遠く將來の事を考へる様な態にて椋木をながめる、秦氏も又物考へに沈む、此の時百姓興作は、被りして花道より登場。途中にて被り物を取りて腰にはさみ庭前に進み中腰にて）

興「これはくく且那様、先程は若様の御祝ひ

に預りまして有難ふ御座ります（秦氏の方に向

つて）興様若様の初誕生、御芽出度ふ存じま

す」

（時國秦氏は顔にて會釋し秦氏は兒供を彼に見せ）

秦「興作どの、わざく禮を聞く程ではないわい

なそれよりこの兒は健やかで喜んで居るのぢ

や」

興「いやもう、御家様の御喜びばかりでは御座り

ませぬこの稻岡の百姓までもの喜びに御座り

ます」

秦「何時に變らぬ興作どの、御上手口、それでも

妾はその言葉が何より嬉しく思ひまするぞ

へ」

與「勿体ない勿体ない、御家様から左様な御言葉を下さつては身の冥加が盡さまするへい」

(と與作は手拭で目をふき言葉を續けて)

與「私共百姓は、御先祖様から代々御慈悲を被りました御恩はとても口では申兼ねる程で御座ります、百姓共は皆若様の御誕生を喜びまするのも心持ちだけなどの御恩返しにと思ふ心根からで御座りますそれに付けてもあの預所の旦那明様の御無慈悲な事と比べますれば天地の違ひで御座ります」

(と與作當國預所明石の源内武者定明の悪口を初めんとする

時國それに氣付いてあわて、差止め)

時「アこれ、與作預所の旦那の悪口は云ふまいぞあれは御役で止む得ぬのぢやから」

(と與作は時國の言葉に反對する様に語氣を荒めて)

與「それでも旦那様、幾ら御役とは申しましてもちつとは涙があるものです可哀相やと一滴位の涙は出さうなものですそれがなければ犬です畜生で御座ります去年の取入れの時の事で御座りました」

(と言ひて與作は無念相に涙を腰の手拭を取りてふき仰言葉

を續けて)

與「旦那様奥様聞いてやつて被下れ、私の隣の彌兵が病氣で床につき残つた女共では取入れが後れまする事は必定それを御納めする日が後れたとからで病氣の彌兵を長い間獄屋に縛ぎまだその上にお米を澤山取り上げられましたあれで御天道様がよふ御許じやと村の衆は御天道様を恨んで居ります」

(時國初めて定明の政治を聞きたる如く驚きて)

時「與作其れは事實か、否旦那預所は左様な事をなすか」

與「旦那様、嘘言か誠か村の衆に聞いて被下れ誰だつて預所の旦那様を善く言ふ者は御座りませぬ」

(と與作尙も無念相に涙を流す時國は慰める様に)

時「いや人は見かけに寄らぬものぢや、然し與作お上の悪口は言はぬがよいぞもしも知れたら(と時國首に手をあて切る眞似をして) お前達の身は二つだそれよれよりのう與作如何程取上げられたか知らぬがその米は私が彌兵にく

れてやるから村の衆に悪口を言はぬ様に傳へて下れ」

〔與作意外の言葉に驚き〕

與「いや御勿体ない、その御言葉で充分で御座りまするにその上お米を頂いては彌兵奴の身のほどがいいえ冥加が盡きます」

時「いや遠慮は無用ぢや、昨年彌兵の病氣の節見舞の品を忘れてゐた今その代りにくれてやるのじやそれでのう彌兵に取りに来る様に傳へて下れ」

〔與作感谷まりてオド／＼聲にて〕

與「御親切に有難ふ御座ります、旦那様この通りで御座ります（と時國を拜む）彌兵奴が聞きましてらさぞ泣いて喜ぶで御座りませう」

秦「與作どの旦那様の御心盡しぢや、左様彌兵どのに申し傳へてくやれ」

〔與作今度は秦氏の方を向いて拜み〕

與「奥様この通りで御座ります、それでは御言葉に甘へましてすぐ彌兵奴に聞かして喜ばして参ります」

〔與作は再び兩人を拜してイン／＼と退場する〕

時「其方も今聞いた通り、浮説に勝る預所源内武者の政事も惨いものであるのう」

秦「仰せの通りそれでは百姓が可哀相でありませう」

時「如何に賤民とは云へ陛下の民草ぢや、それにそんな政治では可哀相なのは百姓達ぢや」

秦「そんな惨い政治をなさる定明様も、ちつとは御佛様の事をお考へになれば左様な事も出来まいに」

〔時國は秦氏の言葉を差し止めて〕

時「秦氏何も言やるな、こんな惨い政治を布いて民を苦しめるのは陛下に對して不忠な臣であるとは云へ、そうして苦しめられる百姓もそれを苦しめる源内武者も皆身からでたさび前の世の定め事ぢやそれを苦にするよりも和子の成育を樂しみに御佛様に精進しよう………どれ佛前に香華でも手向けよう」

〔と言ひ終りて時國先づ立ち續いて秦氏も立ちて退場せんとす
椋木より雀の鳴聲聞ゆ〕

静かに舞台廻る

戯曲 勢 至 丸 第二場

時代 保延七年春の夜明け方

場所 漆家の館時國の寢室

登場人物

漆時國 四十三歳

妻秦氏 四十一歳

勢至丸 九歳

侍 甲 卅歳位

侍 乙 廿五六歳

(床間の掛物半ば傾き四方ふすま倒れ床の間の前の夜具ははね返され其他の物皆夜討の蹟を偲ばしむる狼籍の跡時國手傷を重く受けてよろめきて拔身の刃を杖にして登場し夜具の上に坐し息はづませ)

時 誰かある！誰かある！水を持って！

(其時妻秦氏勢至丸と共にあわて、登場し來り時國の様子を見て驚き)

見(驚き)

秦 御前様には手負ひなされましたるか

勢 父上様には今宵の敵の爲……………

時 話は後ぢや水を持て水を持てよ

勢 心得ました

(勢至丸退場し、すぐ侍甲と共に水を持ちて登場す)

勢 水を持參致しましたいざ召上りませう

時 大儀大儀

(秦氏水を時國に捧ぐ時國水を呑みほして)

時 甘露々々して敵は如何致した

侍 甲 敵はも早や庭前に引きまして御座ります

る

時 うん左様か、されば敵は退却の用意と覺えたり一時も早く堀外に追ひ撤せ!

侍 甲 ハハ……………心得ました御免!

(侍甲追取り刀にて退場す庭前の彼處より刀の相合ふ音聞へ來る時國それに耳を傾け顔をしかむ)

勢 御父上、苦しゆ御座りませうが醫者も唯今呼びに遣せし程に程なく參るで御座りませう、今しばらくの御辛抱を

(秦氏その後を受け繼いで)

秦 なされて被下りませう、余り重からぬ手傷故

手當致さば程なく全快致すで御座りませう

(時國それを押止め頭を振つて)

時 いや、手傷は重い、所詮助からぬこの命な

れば手當も無用ぢや、されど勢至丸其方は今

宵の敵は誰かと思ふ

時國苦笑して幼児の答を待つ、勢至丸とれに發言せんとす
る時侍乙拔身を持つてあわて、登場す

侍乙「申上ます敵は塀外に退きまして御座りませ

す」

時「注進大義ぢや、敵は退く其備は致せ」

侍乙「ハハ……心得ました御免」

侍乙の退場を待ち兼ねて勢至丸は

勢「父上様、今宵の夜討は常に心好からぬ當國領

所源内武者定明奴と心得まする」

秦氏も驚ける氣配なく豫期の如くと思へるか

秦「して其方の言やるその譯は」

勢「されば、今宵手前が敵の中に避難致し居りし

節敵の大將とおぼしき者前に現れ甲の矢を抜き

居れば月の光にすかして見ればまがふ方なき定

明に御座りまして其處で手前は小弓を取つて一

矢を報ひますれば彼の眉間に命中し彼は驚いて

退きましたれど眉間の傷は何より證草を分け

石を起しても探し出し必ず共に父上の仇報いま

するで御座りませふ」

勢至丸涙を流し手をついて答ふ

時「勢至丸、其方の言葉この父は嬉しく思ふぞされ

ど勢至丸將に冥途に趣かんとする父の言葉を

よく聞け今我の討れたるはこれ身から出た

さぢちや(と苦しうに息をつき)廻る因果の

小車は今我に巡り來たりしよ、所詮助からぬ

この命なれども皆この身の宿業ぢや罪の報ひ

なるわい。必ず共に定明を敵と恨み刃を報ゆ

る事勿れ！」

(*)言ひ終りて時國又うゆく、聞きおたる秦氏勢至丸の兩人は

事の意外に驚き殆んど同時に)

秦「現在敵と知れたるその定明を恨むなどは」

勢「既に知れたる敵に刃を報ゆるなと仰せある

は」

(と問ひ寄る、時國苦しうに肩の傷を抑へる)

時「いや兩人、其方等の不思議に思ふも無理から

ぬ事現在仇を見逃すは凡情には苦しけれど、

よく考へて見よ如何にも定明は我が仇ぢや共

に天を頂かざる敵には相違ない、されど我は

何れ彌陀のまします西方に趣く身ぢや、今我

の討れたる前生の罪の報にぢや、罪ほろぼし

になるわい(又苦しうな息をつき)其故今の

我が何よりよい例へ、汝等今定明を恨みて刃を報へば汝等も又彼等の家族の爲に非業の末路を見るはこれ必定かゝる悪因縁を結びなば子子孫々に致るまで兩家の輩は相恨み相討つてあらうかゝる罪業の種を蒔んよりは清き心を持つて御佛に仕へ奉れ、まして勢至丸其方は大慈悲觀音菩薩の賜りし者なれば速やかに出家し、我が菩提を弔ふと共に汝の解脱の直路を求め、又怨親平等一切衆生の救はるべき法門を求めて敵定明の成佛を祈り遣せこれが父時國の最後の頼みぢやいやさ遣言なるぞはや如來の來迎を得たれさらばぢや南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛……………」

(勢至丸父の言を聞いて頭を垂れて深く考ふ、母なる秦氏は尙意外氣にて)

秦「さればとて其れは余りに意氣地のない仕業には御座りませぬか、武士たる者の恥辱ばかりか引いては吾漆家の祖先に對し何んの申譯が立ちまする」

(聞きたる時國は苦しみの中に憤りの相を表し)

時「隣れむべき奴ぢや、其方は未だ武士と言ふ凡人の名に執れ居るか、御佛様の尊い教へが分らぬか、御力が分らぬか武士も凡夫ぢや、例へ敵でもよしなき殺生は御佛の最も重い誠めに叛くのぢや最も恐ろしい罪業なるぞこの時國を見よ、生きたる例へぢや秦氏其方もよく考へて御佛様におすがり申せ後生大事に仕へ奉れこれが凡夫の最上の求め道なるぞ勢至丸父の遣言解つたか!!」

(苦しさうに時國は妻をさとして後勢至丸に答へを促す、秦氏は涙を流して頭を垂る、勢至丸は漸く決心したる如くに頭を上げ涙を拂ひて)

勢「父上様、御言葉確かに承知致しました必ず共に出家得度し尊き御佛の道を求め、父上の菩提を弔ひ且つは一切平等利益の法を宜へまするで御座りませう」

(聞き終りて時國は満足さうに微笑して)

時「幼くとも其方は時國が兒ぢや、嬉しく思ふぞさらばぢや隨分共に健固で暮せ南無阿彌陀佛……………」

(時國手負ひに苦しみて床の上に横りしがしばらくして妻の手

を借りて端座して西方に向ひ)

時「南無西方阿彌陀佛來迎攝し給へ、南無阿彌陀

佛南無阿彌陀佛……………」

(時國の聲漸時衰ふ遠く黎明の鐘なる母子は共に)

「南無阿彌陀佛……………」

(東に旭光さして静かに暮)

戯曲 勢 至 丸 第三場

時代 天養二年二月初旬

場所 菩提寺觀覺得業の居室

登場人物

觀覺得業 四十二歳

同弟子 十二歳

勢 至 丸 十三歳

同母秦氏 四十五歳

幕開く

(觀覺得業等は墨染の法衣に袈裟をかけ机の前に端座し右手を火鉢にかけて左側の床の間にかゝる出山の釋迦の畫を見つめて物思ひに沈む、畫の前に香爐ありて香煙上る、しばらくして手を拍つ、音に應じて彼處にて返事ありて小僧登場し、次の室との間に手をつま をさげて)

小「御師匠様には御用に御座りまするか」

觀「其方が、いや勢至丸をこれへ呼へ」

小「かしてまりました」

(小僧退場し入り變りて勢至丸登場し得業の前に手をつきて頭を下げ)

勢「御呼びに御座りますか」

觀「少し相談したさ儀があつて呼んだのぢや」

勢「して勢至丸に御相談とは」

(觀覺兩手を火鉢にのせ勢至丸に注目し乍ら)

觀「餘の事ではないが、この叔父も數年の間其方を指南して參つたなれど、其方は天資賢明にして今日ではもはや愚僧の手に余る指南すべき事はいや愚僧が出来る事だけは其方に己に教示した、この田舎の寺の生活を續けるなれば天晴れ物識りなれどこの程度の事にては其方の望みも達し得ぬ事は必定又愚僧も其方この地に留めたくはない、後になつて其方が未熟なりし事を悟り、恨みを招きたくないからう、だから其方を天下の學問所叡山に送りて天下屈指の學者とし佛法王法の爲に努力せしめたいのぢや、彼處に行けば善知識も多

數在し、又修業も自由ぢやそれ故其方を送り
其方の素懐なり義兄の宿望なりを達せしめた
いのであるが其方は如何様に考へるのうゝ」

(勢至丸は平服し、涙を流し、やゝして少し頭を上げ)

勢 長年の間御親切なる御指南に預り、其上又唯
今の如き有難き御言葉、叔父上勢至丸は感謝
の念で胸裡は一ばいに御座ります、斯様な高
大な御指南を受けた上又天台山に登嶺し善知
識の教導を得ましたならば必ずや素懐が達せ
られるで御座りませう、イ、エ手前に何の異
存が御座りませう、この親にも勝る深い御恩
には必ずくく御佛の新しき道を求め得て
報ひますので御座ります」

(勢至丸堅き決心を面に浮かばせて得業の面を見守る、得業
は吾意を得たりさばかりに喜びて一ひざ進めて少しうつ向
き)

観 其方も愚僧の心を了解して賛成してくれる
か、それは其方の爲ぢやが、後に残るは其方
の母秦氏どのの返事一つだが」

(と女の心を推量して少し暗い心になる)

勢 母上とても亡父の遺言を實行する事なれば

よもや不服では御座りませう」

観 されど勢至丸賢くとも女の考へは浅いから」

(この時小僧登場し前の如き作法にて)

小 申上ます」

観 何事かのう」

小 唯今稲岡の漆様の御内室の登嶺に御座りま
す」

勢 何母上が」

観 何んと申す、姉上の登嶺とな、然らば直ちに

案内申上げい」

小 かしこまりました」

(小僧退場得業は勢至丸に伺ひ)

観 何事も好都合ぢや、されど其方は母に堅い決

心を見せよ、それが母の承認を得る一策ぢ

や」

勢 心得ましたでは出迎へに……………御免」

(と勢至丸出迎へんとする時母登場し次の間より)

秦 観覺どのの御免被下れ、和子出迎へ無用なるぞ

え」

(と言ひ終りて入室し我子の側に座し観覺に禮し)

秦「いつもながら勢至丸を御世話に相成りました

て誠に有難き仕合せに存じまする」

觀「いや御心配被下るな、これも健固で勵んでお

ますからのう、それより本日は遠い所をわざ

くの御登嶺よくこそ御出で被下れた」

勢「母上様御久しゆ存じます、何時に變らず御健

昌の程、何よりに存じまする」

(秦氏吾兒の成長を見て喜び涙を溢らせ)

秦「其方も健固で御勵みの由、妾は何より嬉しく

思ひまするぞえ」

(觀覺勢至丸の顔をながめ居たりしがやゝして決心したる如くにて一ひさ進め)

觀「時に姉上、未だ疲労も治まらぬ中に突然なれ

ど少し御相談申し度き儀が御座れば乗つては

被るまいか」

秦「して相談に乗れとは何事の」

(この時小僧秦氏に茶菓を運びて直ちに退場す)

觀「他の事では御座らぬ、唯今勢至丸とも相決め

たる仕第で、實は最早や勢至丸の學も上達し

愚僧の指南も至難になりたれば、いっそ、京

都に送り善知識に付けて素懷を遂げしめたい

のぢやが如何で御座る」

(秦氏上洛と聞きて甚だ驚きて吾兒を涙の目で熱視して)

秦「何！勢至丸の上洛とな！」

勢「如何にも手前の上洛の儀で御座ります、母上

日々側にあつて孝養し難き事は残念に御座り

ますれど先考の遺志を遂げる爲上洛致すも之

又孝行の一なれば曲げてお許し下被りませ

う」

(秦氏再び驚きて)

秦「では其方も進んで望まるゝとな」

觀「如何にも勢至丸も望んで居る事で御座るわ

う」

秦「とは言へ、親一人子一人の中この山寺に送る

さへ淋しく思ひまするにまして遠く海山離れ

た都の空へ送りますれば、可弱き女の身にて

は面會も相かなはず、この生別ればこの秦氏

に取つては死する事よりつらく思ひまする」

(秦氏堪へられぬ物の如く涙を流す勢至丸之を見)

勢「母上御言葉返すも無禮なれど、よくお考へ被

下れ人生きて五十年もし迷ひの中に世を終ら

ば次の世を苦惱と迷ひの連續でありませう、然るに今、受け難き人身を受け、會ひ難き佛法に會ひ、起し難き道心を起して遠く都に出離要路の法門を求めに参りませう事は母上に取つて淋しくは御座りませうが、然し吾々母子は無常の世態を實感致したでは御座りませぬか、いやさ世には多くの無常觀を抱きその救ひ道のなき事を歎じてゐる人があるでせうか、人を救ける爲又は吾々の生死解脱を求めめる爲何卒この度の上洛の儀お許し被下れませう」

(勢至丸両手をつき頭を下ぐ母は吾兒の頭に手を置きその黒髪を撫し、新なる涙を注ぎて)

秦 其方がその覺悟なればこの母も止めはせぬど……さりとて長く育みし其方の黒髪もこれが見納めになりませうのか……

(秦氏の心中を察したる觀覺は又暗涙にむせびて横を向きたれど母子の愛着のつらん事を恐れて)

觀 されば姉上も御承知被下るか、これも時國公の心で御座らう、何も勢至丸の上洛は死の道を急ぐのでも御座らねば悲み召さるな思は罪

業の種になる」

秦 さりとて吾兒との……

觀 何事は宿命で御座る、姉上全ては御佛様のあの慈悲深い御胸にお委せあれ勢至丸次へ立て」

(勢至丸涙を霑して得業の意を汲みて無言の中に退場せんとする母別れを惜みて止めんとて)

秦 勢至丸待ちやれ、それは餘りに本意ない……(勢至丸退場す、母泣崩る觀覺も目をしばたき)

觀 何事も前世に詩さし種の芽で御座る果で御座る、姉上御佛様の御力を信じられよ南無阿彌陀佛……

(本堂より本魚の音聞ゆ——舞臺靜かに廻る)

戯曲 勢 至 丸 第四場

時代 天養二年二月十三日の夕暮

場所 京洛町はずれの路傍

登場人物

勢 至 丸 十三歳

同 待 僧 三十歳位

法性寺忠通 四十五歳位

侍 士 甲 二十五歳位

侍乙 三十歳位

其他家來町人多數

(道の左側に櫻樹數本植り末だ花に早し忠通侍士數名連れて
徒士にて花道より登場す、町人多數櫻樹の下に出迎ふ、忠
道公道の櫻を見て侍士に向ひて)

忠 ほう、櫻もまだ少し早いほう

侍甲 御意に御座りまするまだ旬日は早く御座り
ますれば

忠 左様ぢや又出直さうか (町人共を見て) これ
は町人衆大儀で御座るのう

(一同頭を下ぐこの時勢至丸反對側より旅装にて侍僧を連れ
て登場し同じく頭を下ぐ忠道公この童兒を見て少し思案の
態なりしが侍士乙に問ふ)

忠 アあれは何處の若人ぢや

侍乙 何處の御人か存じませねど一應尋ねて参り
ませう程にしばらく御待ち被下れませう

忠 それは大儀ぢやのう

(侍乙直ちに勢至丸の側に來りて中腰にて)

侍乙 これは何處の御人か存ぜねど突然ながらお
尋ね申す、彼處に在す法性寺忠通公より貴名
承り度き由拙者使に参りし程に貴名お漏し被

下るまいか

(兩人は同時に頭をより下げ侍僧それに答へて)

僧 仰せに寄つて申上ます、我々同行二人は美作
國稻岡の住人にて和子は勢至丸と申されます
る

侍乙 美作國の住人勢至丸殿にて御座るか

僧 如何にも

(侍乙引返して忠道にその由を傳ふ忠通二人に近づきて軽く會
釋し)

忠 勢至丸どのとやらして父上の名は

勢 父は漆時國と申しまするが今は已に亡き人
に御座りまする

忠 父は已に亡き人とか、何か奇禍でも御座つた
か

(勢至丸忠通の賢察に驚きの目を見張り)

勢 御察しの通り、父は夜討に會ひ非業の最後を
遂げまして御座ります

忠 して上洛の義は怨敵探索の爲で御座るか
う

僧 仰せには御座りますれど其の義にあらず、佛

道修業の爲に御座ります」

・(忠通何かうなづき)

忠「それでは磨の的はずれか年若きに似ず殊勝な事ぢや然し仇討は已に齊み申したか」

勢「仇討は未だに御座りますれど仇討の代りに佛道に精進し怨親平等の法門を求めよと亡父の遺言に御座りますればかく上洛致して御座ります」

(忠通勢至丸の言葉に感心の態にて)

忠「亡父の遺言とな！誠に結構な事ぢや、何れ又再會の時機も御座らう折角佛道に精進され

」

勢「有難きお言葉に御座ります」

(忠通又軽く會釋して供をつれ尙も夕景を賞しつゝ退場す、

勢至丸忠道の後姿をながめて茫然として立つ、その時町人

甲彼の側に来り)

町甲「ア勢至丸様とやら貴方はお幸福な方やあの

關白にお話をして頂いてなあお前はん」

町乙「左様々々人の幸せは分らぬものぢや」

町甲「で今宵は何處までお出で御座りますもう大分おそくなりましたが」

(此時反に夕霞おりて舞臺薄暗くなる)

僧「今宵は後くならうとも阪本まで参らねばな

らぬ事故これにて御免被下れい」

(と侍僧と勢至丸退場せんとする)

遠く夕鐘なりて靜かに幕

一九二五、五、二五、脱稿

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。